

大規模水田作個別経営の作付行動に関する研究

-北海道南空知・I 経営を事例として-

共生基盤学専攻 共生農業資源経済学講座 農業経営学 小俣 彩

1. はじめに

近年の北海道水田地帯では米価低落が著しく、転作部門からの所得補填による効率的な水田利用が必要となっている。中でも、南空知地域は泥炭地で米品質が劣り高い生産調整率にあるため、より厳しい状況に置かれている。この地域は大規模農業が実現されているものの稲作収益性は低く、そのため良質米地域とは異なり、麦・豆類の本格的生産と定着による転作部門からの収益確保が求められてきた。特に、近年では麦・大豆・飼料作物の土地利用型作物に対して相対的に手厚い転作助成金が措置され、その収量や品質によっては稲作を上回る収益確保が期待できる状況にある。そのような状況の下で、南空知地域では麦・豆類を中心とした全面転作経営が1つの典型的な経営形態となっている。しかし、このような麦・豆類を中心とした全面転作経営では、輪作体系に基づいた土地利用の確立が課題となる。この課題に対して、この地域では「秋麦-秋麦-大豆-大豆」などの作付方式が一応確立してきた。しかし、このような作付方式を取らず、短期的に作付構成が大きく変化している経営も存在する。

2. 課題の設定と研究方法

本論文は、全面転作経営で短期的に作付構成が変化している経営を対象とし、農業経営実態調査に基づいて、その作付行動の特徴を明らかにすることを課題とする。分析期間は2007年から2015年(計画)までの9年間である。

3. 結果

I 経営の作付行動は、2010年の硬質小麦に対する交付金の加算を契機として、それ以前と以後で2つの時期に分けて把握することができる。①2007年～2009年:秋小麦と大豆(祝い黒)の収益性の相対的な関係により、最優先に作付けを行う基幹作物が決定していた。②2010年以降:硬質小麦の収益性が高く、基幹作物は硬質小麦に固定されている。他方、基幹作物以外は収益性に対する考慮よりも、それ以前の小麦から硬質小麦に転換するための準備が優先され、大豆(祝い黒)または小豆が優先的に作付けられている。

4. まとめ

事例経営は、毎年作付けにおいて、麦、大豆(祝い黒)、小豆、緑肥の中から、収益性の相対的な関係を考慮した作物選択を行っている。具体的には、最大限の収益性確保が見込まれる作物を最優先し、経営資源の制約の範囲内で作付けしている。このような作付行動がもたらす連作障害、機械の過剰装備、また、販売対応などの諸問題にも特徴的な対応が行われていることが確認された。